

くまさんだより

日本基督教団 豊橋東田教会

〒440-0055 愛知県豊橋市前畑町 112 ☎0532-54-3435

公式サイト <https://azumada.org/> 武井恵一牧師 080-3428-3200

2020年

2月号

2月9日発行

イラストは全て池谷陽子さんご提供

2月2日 降誕節第六主日礼拝説教

「少年イエス」武井 恵一牧師

ルカによる福音書2章39～52節 新約聖書104～105頁

ルカによる福音書2章39～52節

³⁹親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。⁴⁰幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

⁴¹さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。⁴²イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。⁴³祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。⁴⁴イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、⁴⁵見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。⁴⁶三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。⁴⁷聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。

⁴⁸両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」⁴⁹すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」⁵⁰しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。⁵¹それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。⁵²イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。



39節で「親子」と記されているのは、もちろん父ヨセフ、母マリア、そして幼子イエス・キリストです。子どもが一家に生まれたことは、ヨセフとマリアにとって「神様から、与えられた」ことでありました。

ヨハネと、マリアと、生まれたばかりの赤ちゃんの一家はベツレヘムに滞在して「主の律法に定められたこと」を「みな終え」ました。8日目に割礼をうけ、幼子はイエスと名付けられます。そして、清めの期間が過ぎた時に、両親は幼子イエスを神さまに献げるため、エルサレムの神殿に連れてゆきます。そこでは、シメオンから祝福を受けました。



新しく子どもを授かった神様を信じる多くの家庭がそうであるように、子どもの誕生を心から喜び、心からうれしく祝ったでしょう。また、救い主が誕生されたクリスマスの出来事、羊飼いでよって知らされた町の人々もその場においてお祝いしたことでしょう。

ルカは、「主の律法に定められたことをみな終えたので」と記し、この言葉をひとつの区切りとしています。ここで、イエス・キリストの誕生の出来事はいったん完了しました。ヨセフとマリアの一家は、ベツレヘムからガリラヤのナザレに帰ります。そこで、幼子イエスは神の恵みに包まれ、たくましく、知恵に満ちた少年として育ちました。この後、ルカ福音書には、少年イエスのエピソードが記されています。

ルカによる福音書2章41～42節

⁴¹さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。⁴²イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。

両親はユダヤの最大の祭りである過越祭には毎年エルサレムへ出かけ、毎年同じようにエルサレム神殿に詣でる旅をしていました。

主イエスが十二歳になった時も、両親は少年イエスの成長に気が付かないまま、毎年の習わしに従って都に上ったと見られます。十二歳と言えば中学生になる段階、言い換えれば、大人の知識人と議論できるまでになった時といえます。

この時既に、主イエスは聖書(旧約聖書)に精通し、村々を回るラビ・知識階級の指導者たちをはるかに上回る神学や聖書の理解を身に付けていました。そのずば抜けた知性と発言力はひと方ならぬものであったことでしょう。

ルカによる福音書2章40節

⁴⁰幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

「幼児はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた」と記されているように、既に

幼児の頃から注目を集めていたと読み取れます。

少年イエスは、喜んでエルサレム神殿への旅に参加しました。それは、神様に遣わされた人間としてのご自分が、ひそかながらいよいよ世にでる時を意識していたとも考えられます。けれど、そのような気配は一切見せていませんでした。

そして、過越祭が終わって皆がそれぞれ帰路についた時、少年イエスはエルサレムに残っていましたが、両親はそれに全然気づきませんでした。当時、親族、知人が連れだって、エルサレムに上ったものですから、帰り道、両親は、イエスが道連れの一団の中にいると思っていました。

主イエスのご自分がこれからはることを、しっかり分かっていたと思われませんが、逆に両親は何も気がつきません。一日分の道のりをいってから、やっと少年イエスが帰りの一団にいないことに気づき、親類や知人の間を捜し回りますが、見つからず、捜しながらエルサレムに引き返しました。



マリアとヨセフがどれほど心配したか、想像してください。二人はエルサレム中を捜し回ったことでしょう。けれど、まさか！という思いが強く、エルサレム神殿の境内には入らなかったと見られます。皆様もそのようなご経験があるのではないのでしょうか。

三日もエルサレム市内を探し回ったあげくに、やっと、エルサレム神殿の境内にいる少年イエスを見つけました。最初はごく一般の人々のたむろしているところで話していたかもしれませんが、その時は学者たちの真ん中に座って話していました。少年イエスは、聖書の深い理解を積極的に話しました。彼は、またとない機会を見逃すことなく、ハッキリ意識して話したと思われます。

専門家ともいえる学者たちは、思ってもみなかった少年イエスの言葉を聞き、また、学者たちの鋭い質問にも適切に答える彼の受け答えに驚き、やがて、少年イエスは「驚くべき少年」として、別格と見られたと思います。学者たちに招かれ特別な話合の場が持たれ、食事にも招かれたかもしれません。

そうすることが、学者たちにも当然のことと意識され、また主イエス自身もそのように受け止めたことでしょう。

以前にも触れましたが、ユダヤ・イスラエルの人々は子どもたちを大切にします。そして、どの民族もそこまではしないほど厳しく育て、当時のユダヤの日常語よりはるかに難しいヘブライ語聖書を暗唱させました。それによって培われた能力を、外国の人々、ローマ人などもユダヤ・イスラエル人を高く評価していた状況は聖書記事からもうかがえます。

その背景には「ラビ」と呼ばれる教師が、いたるところで権威を振り回し、小さな村にもいたと見られます。そのような中で人々は少年イエスのズバ抜けた聖書知識に驚き、理解し、高く評価したはずです。

聖書には、「聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。」とあります。

ルカによる福音書2章48～50節

⁴⁸両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」⁴⁹すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」⁵⁰しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。

マリアも、ヨセフも、それぞれが聖霊によって神の子を産むと天使から告げられ、すっかり理解したつもりでしたが、実は「つもり」にとどまっていたことが、母マリアの「なぜこんなことをしてくれたのですか。」の言葉からわかります。

主イエスの「わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」という言葉聞いても、マリアとヨセフは、少年イエスが何をいっているのか分からなかった、と聖書は記しています。主イエスはまだ少年です。両親はかなり怒ったでしょう。



少年にも拘わらず、「わたしが自分の父の家にいる」と神さまを自分の父と呼ぶ自覚が、ここにハッキリと示されています。ご自分が神である父から遣わされた者であると意識されていました。ご自分の父は神である、という神の子イエスの表明が少年の時代にエルサレム神殿においてなされたのでした。ですが、これを両親でさえ受け止められず、何を意味するか分からなかったと聖書は伝えています。

けれども、おそらく、その場にいたファリサイ人や祭司たちは「怒らないでください。この少年の知識と、理解はとてすごいものです。わたしたちは皆感心し、できたらもう何日も話したいとさえ思っています。本当に、できればそうさせてください。」と、口ぐちにヨセフとマリアに言い、本気で引き留めたことでしょう。

その光景を思いうかべると、むしろ始めから「このような結果になるだろう。」と思っていた表情の少年・主イエスが目に見える、とは思いませんか？そんな印象はないでしょうか。

これは、ごく普通のエピソードでしょうか。もちろん、そう言えます。けれど、ここには、まだ少年期でしかない主イエス・キリストの姿がくっきりと鮮やかに浮かび上がっています。

この、ルカによって記されたイエス・キリストのイメージを、私たちは、それぞれどのように受け止めているのでしょうか。

エピソードと言えるこの記事を、わたしはうれしく読みました。この記事には主イエスの多くの記事で感じられる「イキドオリをおさえた、主イエスのイメージ」ではなく、ご自分が神から遣わされた神の子として、「父の神殿でこのように語ったのは自然ではありませんか。」と声をかけられるイエス・キリスト像がうっすらと私たちそれぞれに与えられているのではないのでしょうか。このような少年イエス像に、思いがけなく「神を父とする神の子イエスの素顔」が現れていると見えます。

このような主イエス・キリストであればこそ、「主が、私たちのために、十字架にかけられ、わたしたちのために復活され、そして、やがて、いつかは、わたしたちそれぞれの前にその御姿を、愛を、そのままに表わされる『ナザレのイエス様』が、本当に現れて下さる」ことを思います。わたしたちは、主が再び来られることを信じて歩みましょう。

祈り 讃美歌(21) 287「ナザレの村里」

聖書の言葉はすべて以下から引用しています。

聖書 新共同訳：

(c) 共同訳聖書実行委員会

Executive Committee of The Common Bible Translation

(c) 日本聖書協会

Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

